

歴史から学ぶ「変革の時代」を切り拓く知恵

戦国武将伝～信長・秀吉・家康・信玄・謙信…、 いかに生き、いかに戦ったか～



早川知佐 [歴史プロデューサー／六龍堂代表]

はやかわ・ちさ●東京都目黒区出身、静岡県静岡市在住。幼少時より歴史に傾倒。2006年2月に「歴女」ブームの火付け役的存在となった歴史書の専門店「歴史時代書房 時代屋」を立ち上げ、初代女将を務める。07年より「六龍堂」代表として東京を中心に歴史イベントやグッズ開発のプロデュースなどを手掛け、08年7月、戦国武将・真田幸村公への熱意を買われて信州上田観光大使に。「歴史で地域活性化＝日本を元気に」をモットーに、地方自治体による歴史観光のアドバイザー、歴史ファンへの情報発信、イベント企画・司会、講演、執筆活動を行う。東京神田お茶の水の「レキシズルバー」の初代バーテンダー兼女将でもある。

15世紀後半、応仁の乱によって中央政府の権力が弱まり、足利幕府の統治システムは崩壊しつつあった。そんななか、幕府が変わって、独立した存在として領地を治めようとするリーダーが生まれてくる。実力でのしあがろうとした戦国武将・戦国大名たちだ

歴史プロデューサーという肩書は聞きなれないかもしれませんが、私は“歴女”で、子どもの頃から歴史が大好きでした。

歴史を通してさまざまな時代を生き抜いた人たちの生き方や人生の選択、知恵が学べます。歴史は人生の教科書で、私自身、歴史を知ることによって人生が豊かになったと思っています。なかでも好きなのが戦国時代です。

戦国時代に突入する前の足利幕府は、中央政府である幕府が守護大名を任命して全国各地に配置するという統治システムでした。千葉県であれば上総国や下総国、埼玉県ならば武蔵国など、当時は現在の47都道府県よりも多く国があり、足利将軍の権限でそれぞれの国に守護大名を赴任させ、その地の地方領主や守護大名の家来である守護代が配下となって農民など領民をまとめていました。

ただ、守護大名は基本的に世襲制だったことから次第に領地における権力を強めます。当初は警察長官レベルだったのが県知事のよ

うな力を持つようになります。そして、守護大名間の権力争いが起こる。1467（応仁元）年に始まる“応仁の乱”です。これに將軍家の跡継ぎ問題が加わって、守護大名たちは東西に分かれて戦争を繰り広げました。

10年にわたる争いで、戦いの中心地となった京都は荒廃し、足利将軍の存在が薄まり、中央権力が地方に行き渡らなくなりました。そんななか、“下剋上”の世になっていきます。下が上に勝つ——地方領主や守護代が守護大名を倒したり、追い出して、自分たちで治めようという反乱が各地で起こるようになったのです。ことに地方領主にしてみれば、先祖代々の領地にいきなり幕府の人たちが来て支配してきたわけです。また、守護大名でも、足利将軍の権力から脱し、独立国家として領地を治める大名が出てきます。

戦国武将あるいは戦国大名とは、そうした実力でのしあがった人たちです。守護大名は中央政権下に委任され、その権力のもとで国

を支配する役人でした。戦国武将・戦国大名は、自分たちの領地に新しい支配体系をつくらうとした人たちで、いわば「独立して領地を経営する社長」と言えます。

意外かもしれませんが、彼らの一番の仕事は戦争を起こさないことでした。戦争になれば、領地の貴重な労働力である農民が駆り出

され、亡くなる人がたくさん出てきます。戦国武将には、いかに戦争を回避するか、高度な政治術や外交術が求められ、軍事力の強化も周囲から侵略されないための外交的手段の一つだったということです。戦での強さとともに領地を経営する能力を持つ戦国武将だけが戦乱の時代を生き抜くことができたのです。

戦国武将には、反乱してのしあがった下剋上タイプと、守護大名から戦国大名に脱皮したタイプが見られる。“関東の覇者”と言われた北条早雲は前者で、駿河国の強力な戦国武将、今川義元は後者だった

戦国武将には反乱によつてのしあがった下剋上タイプと、時代の波を捉えて守護大名から戦国大名に脱皮したタイプが見られます。例えば、“関東の覇者”と言われた北条早雲は前者でした。

応仁の乱の30年ほど前に生まれた早雲は足利幕府の役人でしたが、女兄弟が嫁いだ駿河国の今川家の跡継ぎ問題に巻き込まれ、それを上手におさめたことから、今川家から今の静岡県沼津市にあった興国寺城を与えられます。当時、50歳。これを皮切りに、早雲は伊豆、小田原に侵攻し、小田原を本拠に関東一円を5代にわたって支配する北条家の礎を築きます。

破竹の勢いで領地を拡大することができたのは、人心掌握に巧みだったからです。例えば、領地の農民に課す税率（収穫した米の取り分）を領主と農民で5対5とする国が多いなか、早雲は領主4、農民6にしました。「北条家の傘下に入れば、税率がすごく軽くなる」という噂はすぐに広がり、早雲の領地に農民がどんどん流れ込み、旧来の領主を倒して領地とともに早雲傘下に入る武将も出てきました。また、早雲は「国の主体は農民であり、支配者たるものは領民に嘘を言ってはならない」という信念の持ち主でした。領民の支持は厚く、国力が上がり、軍事力も強化さ

れ、多くの領地を手に入れることができたのです。

一方、駿河国の戦国武将・今川義元は守護大名からの脱皮タイプです。義元は応仁の乱から下剋上の世へと向かう1519（永正16）年、代々駿河国の守護大名であった家に生まれ、母親は京都の中御門家の姫、寿桂尼です。当時、貴族の姫が戦国武将に嫁ぐことは珍しくはありませんでした。戦乱の世では、娘を有力な武将に嫁がせ、その縁で生きていくというのが公家たちの一つの生き残り策になっていたのです。

寿桂尼は今川氏親との間に3人の男の子と2人の女の子をもうけました。ただ、氏親は寿桂尼よりかなり年長で、脳卒中で倒れ、晩年の10年間は寝たきり状態となりました。けれど、生きていた以上は氏親が当主です。そんな夫を寿桂尼は支えました。氏親の時代につくられた領内の法律『今川仮名目録』には平仮名がまじっています。当時、平仮名は基本的に女性が使う文字で、これは寿桂尼がこの分国法（領国内を統治するために制定した基本的な法典）をつくるに当たって大きな役割を担っていたことを物語っています。また、氏親が亡くなったとき、長男の氏輝は14歳。彼が元服するまでの2年間、ピンチヒッターとして政治を行ったのも寿桂尼で、

“女戦国大名”と呼ばれています。

ところが、長男の氏輝が16歳で今川家を継いだものの24歳で亡くなり、年子の次男の彦五郎も突然亡くなる。そこで、寿桂尼は三男の義元を呼び戻します。義元は幼少の頃から京都で坊さんになる修行をしていましたが、18歳のとき、還俗して今川家を継ぐことになりました。

義元は公家の姿を好んだことから“公家大名”などと揶揄されることも多いのですが、実は「東海一の弓取り」と言われるほどの武将でした。彼の時代、今川家として最大の領地を手に入れています。そもそも駿河国は肥沃で、米がたくさんとれます。また、東海道や

航路を押さえていたので通行料など現金収入も多い。信長の専売特許のように言われる楽市・楽座も信長に先んじて領地で取り組んでいました。今川の領地は平和で安定し、義元が京都での修行時代に培った、また母親の寿桂尼から受け継いだ京文化を謳歌し発展していました。

そんな今川家も織田信長によって滅ぼされます。しかし、義元の息子の氏真^{うじざね}は江戸幕府で朝廷式の行儀作法などの指南役として召し抱えられ、子孫は幕末まで徳川家に仕えました。今川家は戦国大名としては滅亡するものの、寿桂尼から受け継いだ公家流の文化で生き残り、ある意味で“勝ち組”だったと言えます。

信長の天下統一の基盤を引き継いだ豊臣政権下で戦国時代は終焉する。その後、約260年間の江戸時代は平和で安定した時代だった。歴史とは、点ではなくて線。戦国時代があったから江戸時代があり、さらに幕末、近代、そして今に繋がっている

“甲斐の虎”と呼ばれた武田信玄も脱皮タイプの戦国武将でした。武田家は代々、甲斐国を治める守護大名で、信玄が20代目というほどの名門でした。ただ、甲斐は山に囲まれた地で、米もさほどとれません。また、海がなく、人々の生活に欠かせない塩も他国から買うしかありませんでした。そこで、信玄の父、信虎は戦国大名に脱皮して、日本海沿岸に領地を得ようと、まず信濃国を攻めます。父親の信虎を追放して、若くして武田家当主になった信玄も領地の拡大に努めます。その侵攻はかなり苛烈でした。1547（天文16）年の佐久平での戦い（長野県佐久市）では、信玄は城内に残っていた3,000人の首を全部飛ばし、城の周りに並べたという話も残っています。

信玄の名言に「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、あだは敵なり」という言葉があります。情をもって接すれば城以上に人は国を守るが、あだを与えれば、いざとい

うときに裏切られるという意味です。そうした言葉を残した信玄だけに、恨みを持ちそうな人間は徹底的に殲滅^{せんめつ}したのかもしれませんが、恨みとは残るものです。だから“遺恨”なのですね。息子の勝頼の時代に武田家は織田信長によって滅ぼされますが、「その要因は、勝頼の能力が低かったからだ」と一般的に言われます。私はむしろ、父親の信玄があまりにも恨みを買いつけ、信玄の死でそれが一気に噴出したことが一番の要因だったからだろうと思っています。

そんな信玄の前に立ちはだかり、最大のライバルとなったのが、越後国の上杉謙信でした。謙信と信玄との合戦は5回にも及び、信玄が天下統一に踏み出すことを遅らせたと言われています。

信玄より9歳年下の謙信は下剋上タイプの戦国武将です。越後国の長尾家の次男として生まれた彼は、身体が弱かった兄に代わって家臣の暴動を治め、その手腕が見込

まれて名門の守護大名・上杉家の養子になります。

謙信の初陣は15歳で、生涯の戦績は勝率6割です。“軍神”と言われた謙信のイメージからすれば、この勝率は意外に思われるかもしれませんが。ただし、残り4割は引き分けです。謙信は負けず戦をする天才でした。

そもそも謙信が関わった戦は他国に遠征して行ったものです。謙信は“義の武将”“正義の武将”といわれますが、助けを乞われると、援軍として、その人の領地まで遠征して戦った。信玄との川中島の戦いにしても、武田にやられた武将から援軍を頼まれたからでした。遠征しての戦いでは、食料や鉄砲の弾の補給など常に後方の補給路を気にして戦う必要があります。そういう戦いでの勝率6割であり、自国で戦っていたらもっと勝っていたはずで

す。とはいえ、謙信自身には他国に攻め入って領地を広げようという考えはありませんでした。越後には海があり、街道がある、そして今でも米どころとして有名な肥沃な土地がある。三拍子そろっていた領地であったうえ、朝鮮半島を介して大陸との貿易でも非常に栄え、他国を侵略するというリスクをおかす必要がありませんでした。

そんな謙信や信玄、義元を震え上がらせたのが、戦国時代の異端児、織田信長でした。彼は、超合理主義者の武将で、旧来のしきたりを無視して新しい時代を切り拓こうとしました。しかし、信長も「本能寺の変」で配下の明智光秀に討たれます。その報を聞いた豊臣秀吉は“大返し”——今の広島県から京都に数日で戻り、光秀を討って信長の天下統一への基盤を引き継ぎます。

しかし、秀吉は戦争特需から経済発展への発想の切り換えができなかった。この時代、戦に農民が徴兵されるというよりは、戦うことを生業にするプロの家臣軍団へと変わって

いました。戦がなくなったなら、彼らはどうなるのか。秀吉は隣国の朝鮮や清国に攻め入って戦争を続けるという選択をしました。しかし、戦は長引き、確たる恩賞も与えられぬ戦いに厭戦気分が広がって、人々の心は秀吉から離れていくこととなります。もしも、秀吉が方向転換することができていれば、豊臣政権はかなり長く続いたのではないかと私は思います。

朝鮮出兵の間に秀吉は亡くなり、幼い秀頼が跡を継ぎます。このタイミングを見逃さなかったのが徳川家康です。彼が戦国武将の最終的な勝ち組となったのは、信長と秀吉という2人の天下人の成功も失敗も全部見ていたことです。信長は自ら前に出て率いていく文字通りのワンマン、秀吉も天下をとると家臣の意見を聞かなくなりました。その失敗を見ていた家康は施政で周囲を活かすことを何よりも心がけました。

そんな江戸幕府は260年間続きます。世界の歴史でも、内戦も海外との戦もない平和な時代がこれほど続いた例はありません。ところが、今度は幕末という時代が到来する。私は、幕末とは1600年の関ヶ原の戦いで敗れた大名たちの徳川に対するリベンジだっと思っ

ています。歴史とは、点ではなくて線です。戦国時代があったから江戸時代があり、江戸時代があったから幕末があり、さらに明治、近代、そして今に繋がっています。もしかすると皆さんのルーツにも戦国武将たちがいて、皆さんの今があるのかもしれませんが。また、戦国武将の活躍があったからこそ、皆さんが住んでいる町の発展があるのかもしれませんが。歴史を線として捉えると、歴史はより一層身近なものになります。

[2018年7月18日に行われた「ぶぎん地域経済研究所・ちばぎん総合研究所共催セミナー」より抄録]